

『蜻蛉日記』注釈余滴（二）

今西，祐一郎
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/10408>

出版情報：文献探究. 22, pp.13-19, 1988-09-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



『蜻蛉日記』注釈余滴 (一一)

△西 祐一郎

かくてたえたるほど、わがいへはうちよりまいりまかつるみちにしもあれば、よ中あか月とうちしはふきてうちわたるも、きかじとおもへどもうちとけたるいもねられず、よながうしてねふることなければ、さなゝりとみまきく心ちはなに、かはにたる。いまはいかで見聞かずだにありにしがなとおもふに、むかしすきことせし人も、いまはおはせずとか、など、人につきてきこえごつをきくを、ものしうのみおぼゆれば、日くれはわびしうのみおぼゆ。

上巻天曆十年秋、いわゆる「町の小路の女」に心奪われた兼家の夜離れを述べる部分の一節である。古写本なきがゆえに本文の確定がむつかしく、ために解釈も一定しない箇所が多い『蜻蛉日記』にあつて、右掲出の一節は本文の傷みも少なく、また諸注釈書における解釈にもたいした違いはない。とはいえ、解釈とは本文が定められおのずから出てくるものではもとよりなく、諸注釈書に一致を見られる解釈がかならず正解であるともかぎらない。ここで取り挙げたい

のは、右文中、「むかしすきことせし人もいまはおはせずとか」の読み方をめぐる問題である。「むかしすきことせし人」とは誰か。「恋愛の對手、恋仲の人をいふのでこゝは勿論兼家をさす」と断言する喜多義勇『全講蜻蛉日記』（昭和十九年刊）以来、昭和六十年刊行の『字訳日本の古典 蜻蛉日記』に至るまで、諸注すべてそれを兼家のことと解する。すなわち、「むかしすきことせし人もいまはおはせずとか」を道綱母周辺のおせっかいな人物の詞と見なし、兼家の訪れのとだえに言及したものと読むのである。四十年を越える近代の『蜻蛉日記』注釈史において、今日なお異論を見ない解釈ではあるが、こまかく見れば問題がないわけではない。一つは、天曆八年秋、つまりこの記事の時点からわずか二年前に道綱母のもとへ通ってくるようになった兼家を、「むかしすきことせし人」と、「むかし」の語を冠して呼んでいる点、そしていま一つは、右の詞が「人につきてきこえごつ」という、いささか特異な言語動作として述べられているにもかかわらず、その主語が明示されていない点である。

前者に関しては次のような説明が施されるが、はたしてそれで解決がつくであろうか。

兼家と作者とが結婚してから、まだ二年そこそこ。この「むかし」は「いま」を対照的に浮かび上からせる心理的な過去。そういう意味でも、あるいはこの世人のことばにはじめからあつたのではなく、執筆時に作者の気持を投影して加えられたとみ

るべきか。

(『日本古典文学全集 蜻蛉日記』)

「むかし」が「心理的な過去」だという理解に異論はない。しかしそれはこの場合にかぎらず、文章表現における過去とは、程度の差こそあれすべて「心理的な過去」以外のなものでもないはずである。もちろん、執筆時における書き手の気持の投影という要素は、『蜻蛉日記』の叙述を考える上で無視できない意味をもつ。だが、この種の事柄の文章表現への影響は、まず地の文においてあらわれるのが一般であろう。しかるに問題の会話文をとりまく地の文はすべて、いわゆる歴史的現在で一貫している。つまり書き手は執筆の時点をはなれて、記事の時間に入りこんで叙述しているのである。

このような叙述の中であって、会話文中の「むかし」だけが執筆時をもとにした表現だということが可能であろうか。そもそも二年前の「むかし」が「むかし」たりうるのは、二年後の「いま」の視点に立つからこそであり、それを十数年あるいは二十年以上も後の日記執筆の時点から捉えれば、わずか二年余の間にはさむ「むかし」と「いま」との区別など無きにひとしく、ともに「むかし」に一括されてしまう時間となるのではあるまいか。

「心理的な過去」という視点をもち出すまでもなく、二年前を「むかし」ということ自体は、考えてみればさほど奇異なことではない。問題は、道綱母への通いのとだえた兼家を「二年前」の人間として捉えることが妥当であるか否かにある。たしかに道綱母と兼家との結婚は二年前であった。しかし兼家の訪れがとだえたのは二年前ではないからである。日記の述べるところによれば、兼家のとだえの原因となった町の小路の女の存在を道綱母が知ったのは、結婚の翌年、天曆九年九月であるが、それ以後も兼家の訪れはとだえたわけではなかった。兼家のとだえが本格的なものになるのは、

かくていまは、この町の小路にわざと色に出でにたり。

と記される翌天曆十年の三月以降であり、そして兼家との不和が周辺の人々に知られるようになったのは、さらに後、七月以降であったらしいことが次の記事から推定される。

かくありつゝ、きたえずは来れども心のとくる世なきに、あれまさりつゝ、来てはけしきあしければ、たふるゝにたち山とたちかへる時もあり。近きとなり心ばへ知れる人、出づるにあはせてかくいへり。

もしほやくけふりのそらにたちぬるはふすべやしつるくゆるおもひに

など、となりさかしらするまでふすべかはして、このごろはことゝひさしう見えず。

この記事においてすら、兼家は「たえずは来れども」と記されているのである。冒頭に引いた「かくてたえたるほど・・・」以下の文章は、この記事のすぐあと、桂宮本の下数でかぞえれば半丁と隔たらない所に位置する。ということとは、冒頭引用の文章が兼家のとだえを嘆くものであったとしても、そのとだえはたかたか一、二ヶ月にすぎないということになる。このような状況のもとで、兼家について「むかし」といい、「すきことせし」という表現が可能であろうか。もちろん、一、二ヶ月のとだえであるにせよ、道綱母にとつてそれはきわめて重大な事柄であった。しかしその重大さは、「むかしすきことせし人」をこれまで通り「以前かよっていた人」(角川文庫『蜻蛉日記』)という意味で兼家をさすと解することを命ずるものでは必ずしもないと思う。このことは「すきこと」とい

う語がやがて明らかにしてくるであろう。

二

もう一つの問題、「人につきてきこえこつ」のは誰か——この明示されない主語については、すでに触れたように従来「世間」とか「知人」、あるいは少し詳しく前節終わりに引用した記事に登場する「となりさかしらする」人のような知人と解する（『完訳日本の古典』）のが一般である。周知のごとく、『蜻蛉日記』にかぎらず平安時代の仮名文において、主語が明示されない文はめずらしくない。けれども、それは前後の文脈から主語が自明な場合、あるいは敬語の助動詞その他によっておのずから主語が限定されてくるような場合であることが多い。ところがこの場合は、そのいずれともいいかねる。主語を限定する助動詞のたぐいもなく、また文脈の観点からも、たとえば『完訳日本の古典』のように前記引用の「ちかきとなり心ばへしれる人」と解するには、近接するとはいえその記事との間に、兼家が道綱母のもとに置いてあった「小弓の矢」を取りによこしたという別の話題がはさまっており、それを隔てた「ちかきとなり心ばへしれる人」を無条件に「人につきてきこえこつ」の主語と見なすには、少なからぬ無理を伴う。

この印象は、「人につきてきこえこつ」という動作の性格を考へることによっていっそう強まるであろう。「人につきて」に関する今日の解釈の大勢は、

兼家について。

（『校注古典叢書』）

あの人のことに関連して。

（『日本古典文学全集』、『完訳日本の古典』）

あの方について。

（『講談社学術文庫』）

のごとくであり、また、

あの人に身方して。

（『対訳日本古典新書』）

とするものもあるが、それはいずれも「人」を兼家と解している。しかし次に示すような「〜につきて」の用例を参照すれば、右の解釈は明らかに誤りである。

「この人につきていとしのびてもものしたまへ」といへば、来たり。よび入れて人にも知られであひ語らひける。

（『平中物語』）

仲忠、あて宮にいかできこえつかむとおもふ心ありて・・・御達などにも言ひかけなどする中に、孫土の君とてよきわかうどあて宮の御方にさぶらふにつきて、この思ふことをほのめかし言へど・・・

（『宇津保物語』嵯峨の院）

女御の君につきたてまつりつ、物のぞみせし人々・・・

（同、国ゆづり下）

少将の君につきて奉りて馬允になりたるあなかなの人。

（『落窪物語』巻二）

中の君の御男の左少弁、身いとまつしとて受領のぞまんと、左大臣殿の北の方につきて申しければ、美濃にいたはりなし給ひつ。

（同、巻四）

五巻の日などはいみじき見物なりければ、こなたかなた女房につきてまゐりて、物見る人おほかりけり。

(『源氏物語』蜻蛉)

これらの「くにつきて(つゝ)」は、たとえば、

「人もいくらもまゐらせ給へ。女房おほかる所なん心に、はなやかにもきこゆる」とて、これかれにつきて、ひきひきにまゐれば、二十余人ばかりさふらふ。(『落窪物語』巻二)

の例が示すように、「ある人に付き従い、その人の引きで」の意、つまり、ある人を頼り、その人の縁故、仲介で何かをするという状況に用いられる語であった。右に掲げた諸例も侍女の仲介で恋文を届け、有力者の縁故を頼って官職、地位、便宜を望むといったものばかりである。とすれば『蜻蛉日記』のそれも同様、「人につきて」の「人」は兼家などであろうはずはなく道綱母に「今はおはせずとか」という言葉を取りつく者、すなわち侍女か周辺の縁故者以外に該当する者はいない。

ところで、「人につきて」ということが言及されるのは、右に掲げた諸例からも明らかのように当事者が自分一人の力ではどうにも出来ないからである。もし「むかしすぎごとせし人もいまはおはせずとか」という詞が、たんに陰口やうわさ話としてささやかれているだけの状況ならば、それは「人につきて」という一句を何ら必要とするものではあるまい。にもかかわらず「人につきて」の一句が挟まれたのは、おそらく「きこえこつ」という行動がこの場合「人につく」ということなくしては為しえなかつたものだからであろう。では「きこえこつ」とはいかなる行為をいうのであるか。

懸想人にて来たるはいふべきにもあらず、たゞうちかたらふも、

またさしもあらねとおのづから来などする人の……居入りてとみに帰りげもなきを、供なるをのこ、童などとかくさしのぞきけしき見るに、斧の柄も朽ちぬべきなめりと、いとむつかしかめれば長やかにうちあくびで、みそかにと思ひて言ふめれど、「あなわびし、煩惱苦惱かな、夜は夜中になりぬらむかし」など言ひたる、いみじう心づきなし。……立語、透垣などのもとにて、「雨ふりぬべし」などきこえこつも、いとにくし。いとよき人の御供人などはさもなし。(『枕草子』三巻本)

主人の訪問先での長居に閉口する従者の生態を活写した『枕草子』の一節で、早く帰りたい従者は主人に帰りを促すべく、きこえよがしに「雨がふりそうだ」という。「きこえこつ」とは、このようにある意図のもとに(この場合は主人の帰りを促す)きこえよがしな、あるいはあてつけがましい物言いをする事、と定義しておおむねは誤らないであろう。

例の世人は、匂ふ兵部卿、薫る中將と聞きにく、言ひつゞけて、そのころよきむすめおはするやうごなき所どころは、心ときめきにきこえこちなどしたまふもあれば……

(『源氏物語』匂宮)

「などかさしも。わかる、ほどのかなしびはまた世にたくひなきやうにのみこそはおほゆべかめれど、ありふればさのみやは、なほ世人になづらふ御心づかひをしたまひて。いとかく見苦しくたづきなき宮の内もおのづからもてなざる、わざもや」と、人はもどきこえて、何くれとつきづきしくきこえこつことも類にふれておほかれど、きこしめし入れざりけり。

前者は、匂宮や薫を婿にと望むやんことなき貴族たちが、期待に胸をときめかせてその旨を当人たちにほのめかすということであり、後者は、北の方を亡くした宇治の八宮に、その再婚を望む周囲の者があれこれともっともらしい縁談を聞こえよがしに持ち込んでくるという状況を述べる。いずれも『枕草子』の場合と同様に考えてよい例である。

このような用例に即せば、『蜻蛉日記』の「きこえごつ」もまた、何らかの意図のもとに道綱母の耳へ届くようしむけられた言語行動であったと解すべきであろう。それならばこの場合、道綱母に向けられた何らかの意図とはいかなることであったのだろうか。

「むかしすぎことせし人も・・・」の詞を、たんなる陰口やうわさ話と取る諸注では、「きこえごつ」という語の上述のとき側面はほとんど考慮されていないが、一つだけ傾聴に値する解釈がある。柿本獎『蜻蛉日記全注釈』は次のように述べる。

侍女など作者身辺の人にすがって、「兼家が絶えたのなら、そのあとわたしが通えるように取り計らってもらいたい」と頼みこむ。

すなわち、かの詞を「兼家の後任の立候補をと、侍女を通じて申し込む男の詞」と見るのである。この解釈を、

これを男性の言葉として、「兼家と絶えたなら、私が・・・」と、侍女に仲介を打診したと見る（『全注釈』）のは、穿ち過ぎであらう。

として斥ける注釈書（『新潮日本古典集成』）もあるが、「きこえごつ」という語の性格を考えればこの批判はあたらぬ。柿本氏『全注釈』の説に問題があるとすれば、それは兼家の離反を前提とし

た道綱母への求婚といった、特異な状況における特異な詞を記すにあたって、なにゆえそのような詞の主が記されなかったのかという点に存するであろう。主語を省略するに於ては、それはあまりにも特異な内容の一文であると思われる。主語ははたして本当に記されなかったであろうか。しかし、その主語は実まがうべくもなく文中に明記されていたのである。

画期的な柿本説ではあったけれども、惜しむらくは前節で取りあげた「むかしすぎことせし人」の解釈については諸注に異を唱えるには至らなかつた。鍵はこの一語の読み方に隠されている。ここでふたたび「むかしすぎことせし人」とは誰かという第一節の問題にたち戻り、その先を続けなければならない。

三

第一節で述べたように、「むかしすぎことせし人」に兼家を宛てることが必ずしも適切ではないとすれば、他にどのような可能性が残されているであろうか。この点を考えるにあたって注意を払うべきは、『蜻蛉日記』における「すぎこと」という語の用いられ方である。といつても『蜻蛉日記』に「すぎこと」の用例が多く見出されるわけではない。むしろ逆で、他には一例のみであるが、その一例がこの日記におけるこの語固有の意味を浮かび上がらせることになる。その一例は上巻冒頭の序に続いて兼家からの求婚を述べる最初の文に見出される。

さてあはつけかりしすぎことどものそれはそれとして、柏木の木高きわたりよりかくいはせむとおもふことありけり。

たとえ結果がどうであろうと、ある作品に二つしか存在しない語の一方の意味を考えるに際して、もう一つを参照しないという法があるか。まして一方の意味が必ずしも判然としない場合においてをや。ところがこの基本的な手順をふまえた注釈書は近代の『蜻蛉日記』研究においては皆無である。しかし先覚は近代以前にいた。

昔スキゴトセシ人ハ、発端ニ、アハツケカリシスキゴトドモニ
相照スベシ。

と述べた『蜻蛉日記解環』の著者坂徴である。記述は簡略であるが、その言わんとしたことは、たんなる用例の参照ではない。「相照スベシ」とはおそらく「照応する表現である」という意味であり、つまり、『解環』の著者は「むかしすぎごとせし人」を『蜻蛉日記』発端に記された「あはつけかりしすぎごとども」を為した男（たち）と見ているのである。

考えてみれば、「すぎごと」と結婚とは明らかに区別されねばならぬ事柄ではなからうか。

「両うちふりていとつれづれなる日ころ、女はくもまなきながめに世の中をいかになりぬらんとつきせずながめて、すぎごとする人々はあまたあれどたゞいまはともかくもおもはぬを、世の人はさまざまにいふめれど、身のあればこそとおもひてすぐす。

・・・七月になりぬ。七日すぎごとどもする人のもとより、たなばた彦星といふことどもあまたあれど、目もたゞず。

まゐらんほどまでだにびんなき事いかできこしめされじ、ちかくてはさりととも御覧じてむと思ひて、すぎごとせし人々の文をも、「なし」などいはずしてさらに返りこともせず。

『和泉式部日記』に見えるこの三例は、一方に、この場合、結婚ではないけれども、敦道親王との密接な関係があつて、それとの対比で、式部にとつては当面相手にする気のない（なかつた）男たちのことをさしている。『蜻蛉日記』における「すぎごと」という語の位相も、これらとほぼ同様に考えてよいであろう。「あはつけかりし」すぎごと」とは、兼家との結婚を境として、それ以前に道綱母に言い寄っていた男たちのふるまいをさす言葉であつたからである。とするならば、その同じ語を含む「むかしすぎごとせし人」という語句が、何はともあれ少なくとも道綱母の夫であつた兼家をさすものであるなどと考えられるであろうか。それよりもむしろ『解環』の指摘するごとく、この「むかしすぎごとせし人」を発端の「あはつけかりしすぎごと」と「相照ス」措辞と解して、兼家との結婚以前に道綱母に言い寄っていた男（たち）と見なす方が、はるかに自然である。こう理解してこそ「むかし」の一語も生きてくるであろう。

しかしどういふわけか、『解環』の卓見はこれまでの注釈書の採るところとはならなかつた。その卓見は紹介すらされずほとんど無視に近いといふべく、中で唯一『解環』に言及した『蜻蛉日記注解』も、

解環は「昔スキゴトセシ人ハ、発端ニアハツケカリシスキゴトドモニ相照スベシ」と、作者の結婚前の愛人のことに解しているが、明らかに誤りである。

と、いとも簡単に否定し去るのみ。そして「やはり通説のように、かつてはしげしげと作者のもとに通つていた兼家が、いまではちつとも来なくなつたそつたの意である」と続けるが、その「通説」が『解環』の説を「明らかに誤りである」と断言できるほど確かなも

のではありえないこと、すでに見てきた通りである。「注解」がさしたる根拠も挙げずに「解環」説を「誤り」と決めつけたのは、思うに『蜻蛉日記』の本文を

「むかしすぎごとせし人も、いまはおはせずとか」など、人に
つきてきこえこつをきくを……

と読むものと信じて疑わず、他の読み方の可能性について思いをめぐらさなかつたからであろう。右の読み方に固執するかぎり、たしかに「解環」説は成り立たない。しかしいうまでもないことながら、原文には会話文を示す符号など施されてはいないのである。当該箇所についての「解環」の注釈は、すでに示したように簡略で詳しい説明を欠くが、坂徴は日記本文を

むかしすぎごとせし人も、「いまはおはせずとか」など、人に
つきてきこえこつをきくを……

と読んだのである。会話文の頭に付ける符号の位置をわずか十一字ずらすだけで、『蜻蛉日記』の本文は面目を一新する。二例しか用いられてない「すぎごと」の語が、「むかしすぎごとせし人」と「あはつけかりすぎごと」との照応によって明快な意味の一貫性を現わすだけではない。「むかしすぎごとせし人」が、「人につきてきこえこつ」の主語として浮かびあがってくるではないか。前述した意味での「むかしすぎごとせし人」こそ、「人につきてきこえこつ」という行動の主語としてもっともふさわしいものであることはあらためて説明するまでもあるまい。他方、この読み方によって主語を失うことになる「いまはおはせずとか」に関しては、前後の文

脈および「おはす」という敬語によって、兼家が主語たることは自明、何ら問題はない。むしろこの一文こそ、元来主語が明示されなくとも一向さしつかえない文だったのである。「解環」の指摘からおのずと導き出されてくるこのような読み方を示す注釈書は、先にふれたようにまったくない。しかし目を注釈書以外に転じれば、具眼の識者はいないわけではなかった。「国文学解釈と鑑賞」昭和五十三年九月号の『蜻蛉日記』特集に収める、目加田さくを「内向する世界——かげろふの日記作者の意識」は、「解環」の示唆するところと同様、「いまはおはせずとか」のみを会話文とする本文を示し、次のような口語訳を付している。

昔、文通していた男性が、「兼家様は、もうこの頃いらっしやらないそうですね。では、私とよりをもどしてはいかが？」なんて、取次を介して、ゴタゴタ言いよってくるのをきくにっけても……

この一文の書かれた昭和五十三年以降に刊行された注釈書でさえ、右の箇所についてその説くところは依然それまでの「通説」の域を出ない。注釈書を著すほどの『蜻蛉日記』の「専門家」においてすら、時に「通説」というものがいかに頑固な先人観となつて視野を狭めていることか。『蜻蛉日記』のみの専門家ではない目加田氏によつてしめされた正解は、「通説」という名の先人観の根強さを雄弁に語っている。

—九州大学助教授—